

70才の誕生をむかえたベルシェロン教授

須 田 建*

ベルシェロン教授 (Prof. Tor Bergeron) の名は、いわゆるベルゲン学派の一人として、またその気団論や氷核説によってあまりにも有名であるが、Tellus の最近号 (Vol.13 No.2) によれば同教授は1961年8月15日をもって70才の誕生日をむかえた由で、C.L. Godske が祝辞の小文を寄せている。一般の読者にも興味があると思われるので次に紹介しよう。

“トール・ベルシェロンがもう70才というおめでたい年になったとはほとんど信ぜられない位である。私は今までずっとトールを年下の仲間として扱い、彼に対しては、ふつう人が、ひたむきな若い熱心家にするように暖かい同情と思いやりを感じて来た。フリチョフ・ナンセン (Fridthjof Nansen) は、「冒険心」を持つことが若い人の特権だと言っている。トール・ベル・シェロンは冒険家であったが、その活動舞台は未知の北極地方ではなくて、大気の未知の領域であった。彼は「どうして」とか「なぜ」とかの質問を特に天気の問題に向けたのである。

トール・ベルシェロンは生来の気象学者である。自然の美に対する感覚ならびに、自然の上機嫌と不機嫌 (天気の定義としてはあまり科学的でないが) に対する鋭い観察力を性格とするこの青年は、1918年にラブランドにおいて大気の視程条件に関する詳細な研究を行ない、こうして「気団」の問題に対し新しい独特の方法で肉迫したのであった。その後、間もなく彼はベルゲンに行き、ヴィルヘルム・ビャルクネス (Vilhelm Bjerknes) が作った密なノーウェーの観測網を用いて気団の問題を取扱うことができた。すでにその頃にはビャルクネス (J. Bjerknes) やソルベング (H. Solberg) が気団の研究を始めており、低気圧の波動模型を発見した。ベルシェロンは閉塞を発見し、また前線形成作用や気団の発見により、次のようなモデルの数々を描いてみせてくれたのである。それは準定常前線、波動、波動低気圧、大規模な低気圧に発達して双曲点を形成させこれによって新しい準定常前線を生ずる可能性のあるような閉塞低気圧、などである。進化 (evolution) ということがベルシェロンのモデルの特徴をなしているが、これは雲物理についても同じである。彼の雲形は固定した幾何学的なものではなく、純粋に水または氷でできた雲から、混り合った

降水を伴う雲への発展を示すものである。そのうちあるものは安定な暖気団に、また他のものは不安定な寒気団に属する。

トール・ベルシェロンはベルゲン学派の中の哲学者で、一般的原理と詳細な解析の問題のいずれにもひとしく興味を持っている。彼の「3次元結合天気解析」(Dreidimensional verknüpfende Wetteranalyse) は決して読み易いものではない。でも読んで見給え、それは近代気象学の旧約聖書なのだから！ その後の彼の論文で雲物理や降水分布における山岳の影響に関するものも同様に良い刺激になる。

ラファエルの「アテネの学校」(School of Athens) は世界の名画の一つである。この絵では、壮大な柱やアーチから成る立派な建築に囲まれて、ふたりの人物が自然の中心を成すように立っている。そのうちのひとりであるプラトンは上方の概念の世界を指さし、もう一人のアリストテレスは、われわれの注意を地球とその問題全部に向けている。若い気象学者で、プラトンのように高層大気の数学的モデルの概念世界を指さし、500ミリバール面まで飛び上る (そしてそこに留まる) ような人の数が日増しにふえて来ている今日のような時代には、われわれのアリストテレスが要求される。この現代のアリストテレスは、ニイチェのように、地球、すなわちその上では飛行機が離着陸し、船が航海し、漁夫は悪天に悩み、農夫は雨やかんぱつを恐れ、すべての人が明日の天気を知っている「そのような地球に忠実であってほしい」と懇願する人である。

トール・ベルシェロンは世界中に友人を持っている。彼の興味深い講義と元気な話し方 (それには言語学が、文化問題が、そして最後に是非あげるべきものとしてバッハの音楽がまじりあってよく出て来る) は、彼の若い仲間である大勢の人々に鼓舞と激励を与えて来た。

彼等は今日、古稀をむかえたこの「偉大な老人」に敬意を表したがっている。しかし「尊敬」とか「古稀」のような厳肅な言葉は、彼を知っているわれわれにとって適切な言葉ではない。われわれは、彼がさいわい将来とも興味ある研究を続けるよう祈り、新しい含蓄に富んだ講義と元気な話を聞かしてくれることを切望するものである。

* 気象庁長期予報管理官室